

大学体育教育の検討

犬 飼 己紀子

はじめに

57年4月、高等教育の弾力化、柔軟化、多様化、国際化をめざし、短期大学の設置基準の一部改正が行われ、各機関に通達された。翌58年12月に開かれた私立短期大学協会体育担当教職員研修会に参加し、この基準改正がなされる中で、その中核的な立場にある方々の個人的な見解として、「大学体育が必修でなければならぬ必要はなく、選択とすべきだ」との考えがあり、問題化しつつある事を知らされた。地方の短大に勤務し、通達のみを受け止めていく中では予測のできない問題であった。その内容は、健康や体力の為に体育は必要だ、としながらも体育担当者の取り組みがそれを充たすものではない。という指摘、又、現在の大学のおかれる環境の中で、体育施設確保困難、等の諸問題をなげかけ、そうした時間や経費を多方面に生かす事で、大学の充実を計っては、というものである。折しも本学では、十周年という区切りの年を迎え国文科新設、という新たな一步を踏み出した。幼児教育科の単科であった昨年度までとは違い、二学科の体育実技を担当し、その意識の違いに驚かされた。両学科の学生の運動意識を向上させようと苦慮していたさ中であっただけに、「大学体育を選択に」という流れに反論する気持が一層深まった。

大学体育が選択となったなら、運動の好きな学生中心の授業展開となる事が考えられる。スポーツを行おうとする指導者にとっては、展開のしやすい授業となる事であろう。しかしそれは体育の授業ではなく、課外体育に近い内容のものになる事が考えられる。体育は、スポーツのみを指す言葉ではない。その事を踏まえ考えると、むしろ運動が嫌いな学生を対象に展開される授業が、本来の体育ではないだろうか。複雑化、多様化する社会に適応できる健康な人間の育成を目指し、大学体育は必修であるべき、と考える。

本学においても、流れの中での学生の変化を確実に受け止め、大学体育の必要性を確信を持って訴えていくための実践を考えてみたい。

58年度、新たに国文科生の体育実技を受け持つ事となり、正課体育を国文科生にとって受け入れやすい内容のものにしていこうと考えた。そこで、国文科生の体育実技に関する意識を探るため、「私と体育実技」のテーマでレポートを提出させた。それを一読し、授業展開の方法を考え直す必要のある事を感じた。

本学紀要第六号掲載の論文、「学生生活と健康」の中で、『保健・体育のねらい』を掲げた。その内容は、次の通りである。

保健・体育のねらい

- 1 保育者として、健康意識を持つ事の重要性を自覚する。
- 2 自らを健康管理できる状態を整えその能力を養う。
- 3 運動経験を生活習慣化するまでに高める。
- 4 社会体育に積極的に参加できるよう運動能力、運動経験を高める。

以上4項目を、これまで幼児教育科生に向け、指導してきた。このうち1項にある「保育者」を「社会人」に置き替え、国文科生にも当てはめ、継続して指導したいと考えた。しかし前述のレポート内容を見ると、直接4項目のねらいを当てはめていく事は困難であると考えた。そこで今まで指導してきた幼児教育科生との比較から、国文科生の運動意識を探り、積極的な運動行動を起こさせるための体育教育を考えてみた。

I 国文科生の運動意識

イ 正課体育への意欲

提出されたレポートの内容を、再度区分してみた。表1がその結果であるが、最初に感じた程、体育を拒否する態度を示した内容のものが多くはなかった。

高校までの正課体育を含め、短大体育にも積極的意見を示したものが25、逆に消極的な意見を示したものが26、とほぼ同数となっている。どちらにも区分できないものの中には、「不得意ではあるが、嫌いではない」というもの、その他には、体育実技だけについて述べ、自分とのかかわりについては、触れていないものを区分した。具体的な内容で「大学にまできて何故体育をしなければならぬか。」「私と体育とは無縁のものである。」といった強い拒否の態度を示す学生もあったが、反面、「社会生活、健康生活において、運動は欠かす事ができない。」といったものが多く目についたので、取り上げ同表にまとめた。その結果、積極グループに18、消極グループにも10、含まれていた。これまで受けてきた体育教育で、得意、不得意に関係なく、体育の必要性を認めている学生が多くいる事がわかる。

表1 学生の正課体育への意欲

内 容	数	『体育は必要』と考える者 人 (%)
体育・運動に積極的な意見を示したもの	25	18 (72%)
体育・運動に消極的な意見を示したもの	26	10 (38%)
どちらともいえない	9	—
そ の 他	1	—

(上田女子短期大学・国文科1年レポートより)

1984年4月

表2は、消極的意見を示したレポートのみを取り出し、その内容から消極的意見となった理由と思われる事がらについてまとめたものである。

表2 正課体育に消極的意見を示した者の理由

理 由	数
下手だから	10
他人に迷惑をかける	5
身体を動かす事が嫌い	2
授業内容に問題を感じる	2
教師の指導に問題があった	1
怪我をした	1

(上田女子短期大学国文科1年レポートより)

1984年4月

主な理由は、「下手だから、苦手だから」又、「他人に迷惑をかけるから」といった内容のものであった。集団行動をとる中で、自らの技術力を直ぐに他人との比較で把握し、それを劣等意識につなげ考える事に原因があるといえよ

う。このような学生には、正しい自己評価の方法を指導するとともに、授業に取り入れる運動種目を選択し、(団体競技・個人競技・対人競技など)与えていく事で対処できると考える。実際に、この種のレポートの中には、「1, 2の種目に限っていえば、むしろ積極的に取り組んでみたい。」という意見もあり、全面的に否定する姿勢ではないものが多かった。又、「身体を動かす事が嫌い」、「授業内容に疑問」などの理由をあげた学生について、指導者側で把握できた事は、授業を展開していく上で、個々への対応が具体的に行え、好ましい結果を引き出してくれたと考える。

以上の事を含め、58年度国文科生に対しての授業展開で、考慮した点を上げてみた。

授業展開の留意事項

- 1 展開に変化をつけ、消極的態度の学生に積極参加の場を与える。
- 2 グループ活動を展開させながら、指導者が、1人1人に接する時間、回数を多く持つ。
- 3 種目による得意、不得意を認める。
- 4 運動中に積極的に声をかける。(後で指摘しても、理解しようとしな)同時に良いプレーは認める。
- 5 欠席については厳しい態度を示す。

結果的に、前述のレポート分類の消極グループの学生に重点を置いた展開となった。そして、1クラスの受講者数30名という構成は、グループ活動する上においても、指導者が1人1人を深く把握する、という点からも最適の人数であった。

以上進めるうちに、時間内の学生の動きは、1人1人に活発さが見られるようになった。このように、体育の授業への参加のし方に変化が見られたものの、根本となる運動意識の向上が促されたか、という点になると、否定せざるをえないようである。この結論を裏付ける1つの事例があるので次に掲げてみた。

ロ 課外体育活動への意欲

58年度秋、本学に運動施設(グラウンド・テニスコート2面)が整備された。これを記念に学生に呼びかけ、学生の自主活動として進めたレクリエーションスポーツ活動がある。この時に見られた、国文科生と幼児教育科生の参加の違いについて考えてみた。

事例

経過 58年6月 グラウンド・テニスコート整備に着工

9月 完成

10月 学生に開放

これを記念に、グラウンド利用の活発化を考え、「グラウンド完成記念ソフトボール・リーグ戦」を開催し、学生に有志でのチーム結成を呼びかけた。

参加チーム

幼児教育科1年B組 17名

幼児教育科1年D組 18名

幼児教育科 2 年 B 組	14 名
幼児教育科 2 年 C 組	13 名
幼児教育科 2 年 混合	10 名
以上 5 チーム	72 名

日程 10月27日 開会式（木・土曜日午後，試合）

12月中旬 試合終了

開始時期が遅く，試合数が限られた事から参加チームを申し込み順に受け付け，数を限らなければならなかったのは残念であった。

この大会の呼びかけに対し，参加申し込みは，幼児教育科生だけであった。国文科生に対しては，体育担当教官，クラス担任からの呼びかけが行われ，学生の中に動きは見られたものの，チーム結成までには至らなかった。

体育の必要性を認め，授業に活発さが見られるようになったにもかかわらず，学生の自主的運動行動に結びついていかない，という点について，授業見直しの必要性を強く感じた。

II 幼児教育科生と国文科生の相違

イ 本学体育受講生のアンケート調査から

以上，学生のレポートを元に，58年度国文科の体育教育を行ってきた。来年度以後は，学生数の増加に伴い，個々への対応も58年度並に行う事が困難となろう。前述の授業見直しの反省を踏まえ，現時点でより深く学生を把握しておこうと考えた。

これまで授業，課外活動を通じて接触してきた幼児教育科生を目安とし，その比較から具体的に国文科生の運動意識を知ろうと，体育実技を受講している両学科生にアンケート調査を実施した。

アンケート実施時期 1984年 9 月

アンケート対象者 体育実技受講生

集計 表 3

	総 数 (人)	回 収 数	回 収 率 (%)
幼 児 教 育 科 II 年	189	175	92
国 文 科 I 年	61	53	86

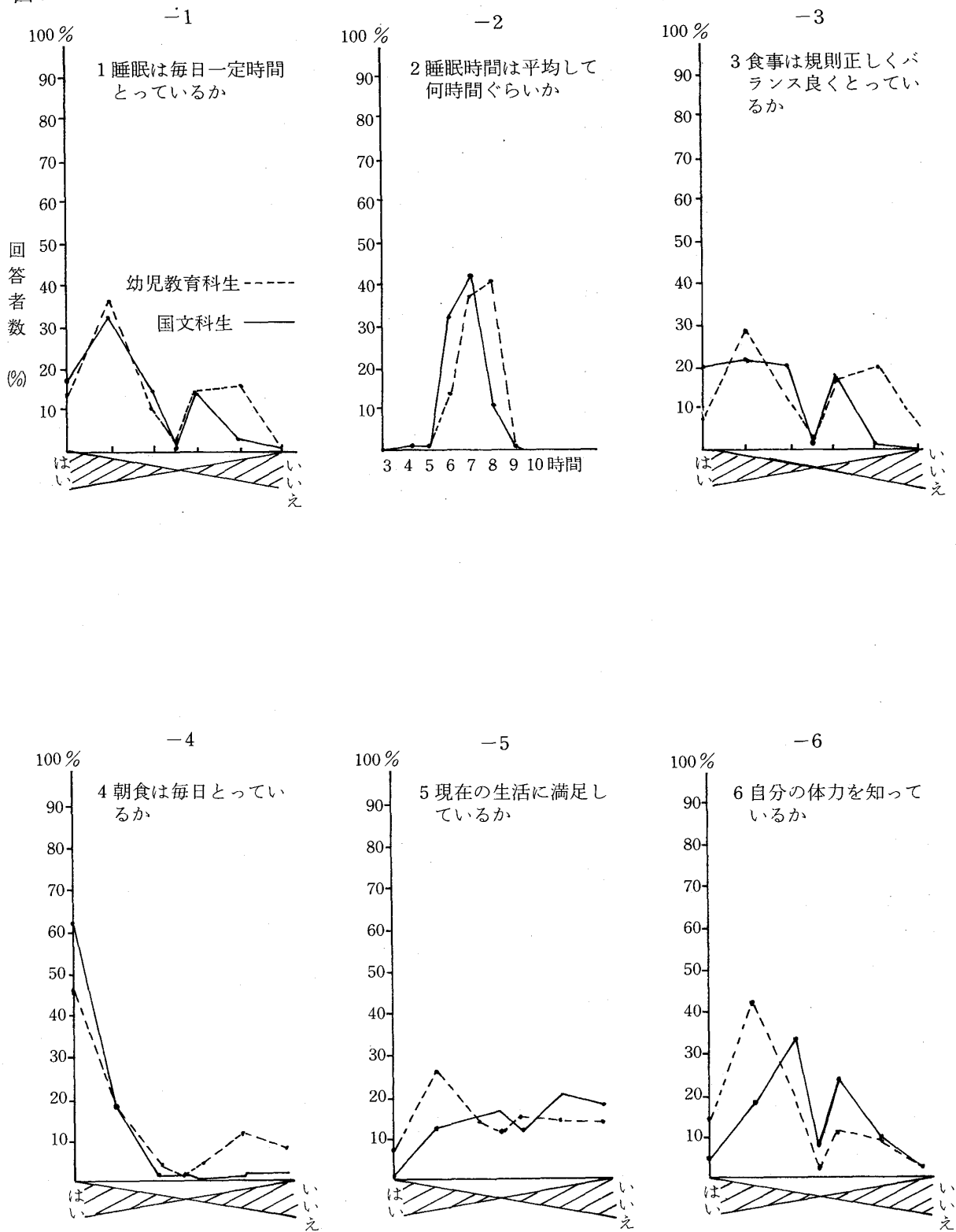
運動意識は，健康に対する意識を持つ事によって一層高められる。という考えから，今回のアンケートでも，最初に健康生活がなされているかどうか，を探る質問を行った。

図 I—1～11は，生活の中でどの程度健康を意識しているか，を質問した11項目についてまとめたものである。回答の意味合を細かく知るために，肯定，否定について6段階の回答を記入できるよう配慮した。図に表わした~~XXXX~~は，それを示すものである。

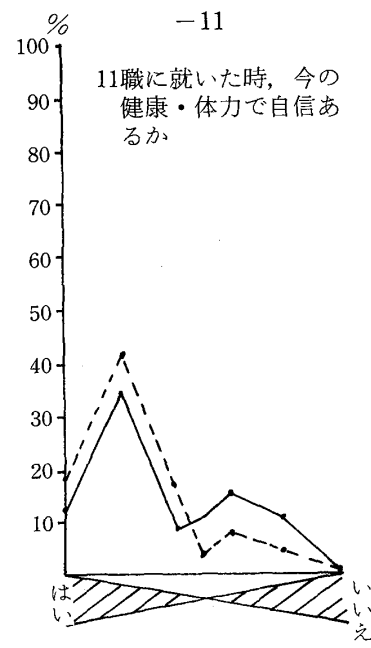
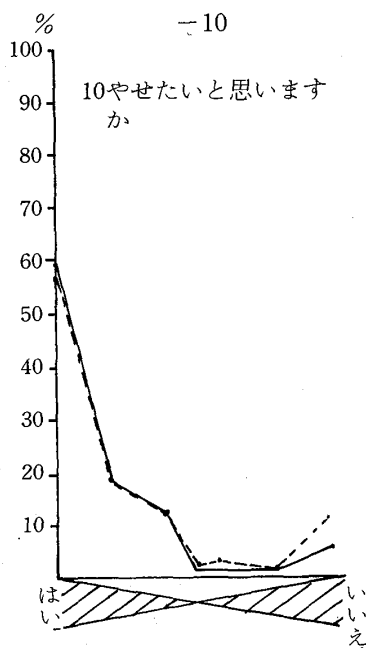
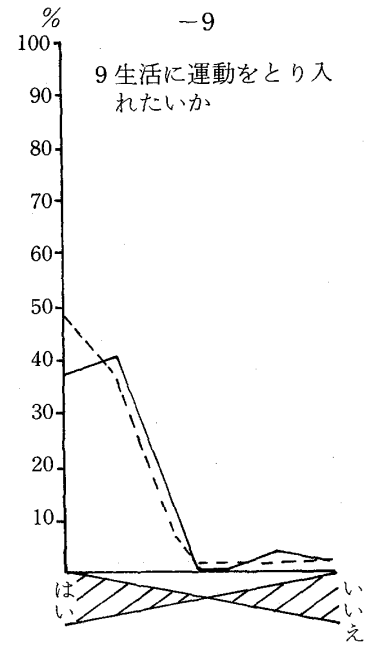
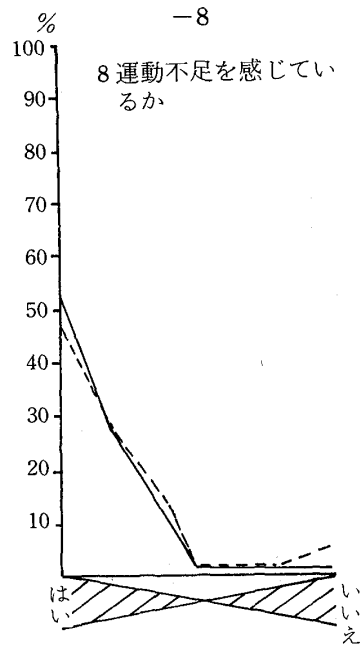
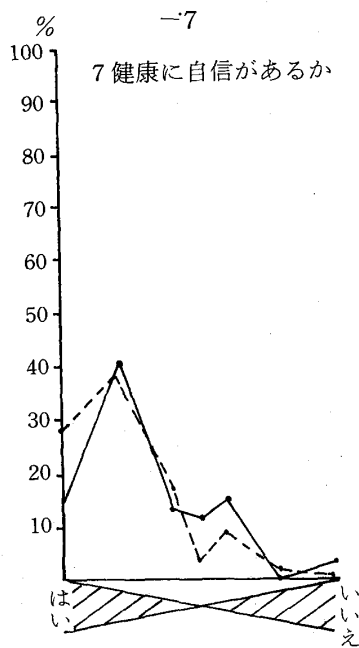
この結果から，次のような学生の生活内容の違いが伺える。

- 1 睡眠時間は，幼児教育科生に若干，不規則さが見られる。しかし睡眠時間を平均すると，国文科生に比較し，幼児教育科生が多くとっている事がわかる。（図 I—1・2）

図 1



大学体育教育の検討



上田女子短期大学，体育実技受講者へのアンケートより

1984年 9月

- 2 食事についても、幼児教育科生が不規則になっている様子が伺える。(図Ⅰ－3・4)
- 3 「生活に満足しているか」の質問に対しては、国文科生が幼児教育科生に比較し、消極的な回答となっている。(図Ⅰ－5)
- 4 幼児教育科生は、国文科生に比較し自分の体力を知っていると回答する者が多く、それに関連してか、健康に自信を持つ学生が多くなっている。(図Ⅰ－6・7)
- 5 両学科生ともに、運動不足を感じているが、運動欲求を見ると、幼児教育科生が強い欲求を示しているのに比較し、国文科生は、中程度の運動欲求を示す学生が多くなっている。幼児教育科生に比較し、運動への興味の薄さが伺える。

以上の事から、基本的生活習慣である睡眠、食事については、幼児教育科生に比較し、国文科生が健康な生活習慣を慣行している様子である。しかし、健康を維持するための積極的治療ともいわれる運動・スポーツに対する調査結果からは、国文科生の意欲が劣っている事がいえる。生活満足度、健康、体力について幼児教育科生に積極的な回答が現われたのは、Ⅱ年時である事から、学生生活を自分のものとし、又、進路決定が間近に具体化されてきた事、実習などの体験を通じて、自らの体力を知る機会があった事が大きな要因となっていると考える。国文科生についても、Ⅱ年時に向け同じ意味合を持って意欲が向上していく事を期待したい。

次に「運動・スポーツに求めるものは何か」の質問をし、回答を得た。

図Ⅱ－1は、「運動・スポーツに一番求めるもの」図Ⅱ－2は、「運動・スポーツに二番目に求めるもの」をまとめてみた。

図Ⅱ－1 スポーツ・運動に1番求めるもの

	体力維持	娯楽	精神鍛練	ストレス解消	仲間づくり	美容	その他
国文	49%	17%	15%	13%	2%	2%	2%
幼教	42%	17%	21%	8%	11%		1%

図Ⅱ－2 スポーツ・運動に2番目に求めるもの

	体力維持	娯楽	精神鍛練	ストレス解消	仲間づくり	美容	その他
国文	15%	19%	15%	19%	15%	15%	2%
幼教	25%	19%	14%	16%	22%	4%	

(上田女子短期大学 体育実技受講生のアンケート調査より) 1984年9月

幼児教育科生、国文科生ともに、「一番求めるもの」(図Ⅱ－1)に体力維持を掲げている学生が半数を占めている事がわかる。しかし、残りの半数については、幼児教育科生が、精神鍛練、娯楽、仲間づくり、ストレス解消であるのに対し、国文科生は、娯楽、精神鍛練、ストレス解消、仲間づくりと、順位に違いが見られる。又「二番目に求めるもの」(図Ⅱ－2)の結果を見ると、図1に比較し、回答にばらつきが見られる。体力維持のねらいが減少し、仲間

づくり、美容、ストレス解消といったものの増加がその原因となっている。「一番求めるもの」に寄せられた回答は、これまでの身体形成期に体育教育で学んできた知識が影響していると思われる。学生は今後社会人となり生活していく中で、いつかは、運動の必要性を感じる時が来ると思う。その時、運動に求めるものは、仕事からの解放、娯楽、ストレス解消、といった生活の活性化を目的とする内容が大きな位置を示すようになる事が予測される。

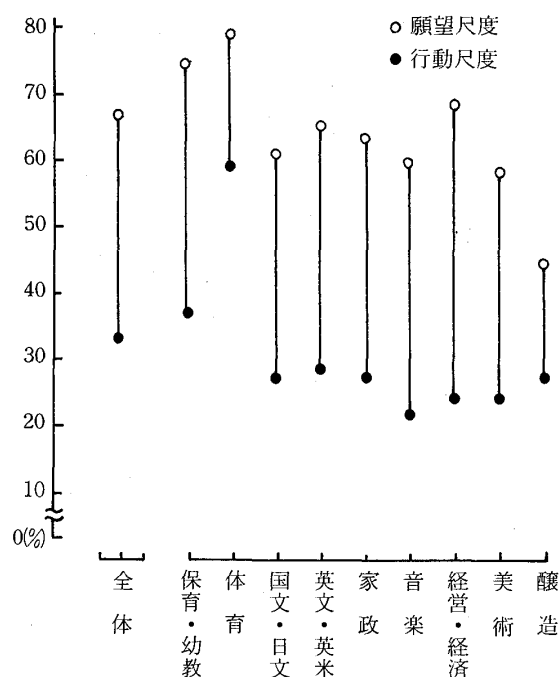
以上のアンケート結果から、学生は運動の不足を強く感じ、運動欲求を持っている。しかし、幼児教育科生と国文科生とを比較すると、運動欲求の強さ、運動のねらいとするものに、若干の違いが見られる事がわかる。前述の課外活動における事例での両学科生の参加の違いは、このアンケート結果からもうなずけるものである。

ロ 短期大学生の専攻別運動意識の違い

これまで、本学学生の運動意識について、幼児教育科生、国文科生の違いを見てきた。

図Ⅲは、私立短期大学協会で調査した学生の運動に対する専攻別積極的指数の比較を現わしたものである。○印は運動をしたい、という願望尺度を現わしており、●印は、実際にどの程度運動をしているか、という行動尺度を示している。

これによると、保育・幼児教育専攻学生は、体育専攻学生に次いで願望・行動尺度ともに2位となっているのに対し、国文・日文専攻学生は、低いレベルにある事がわかる。これを前述したアンケート結果に照らし合わせてみると、運動欲求の違いを願望尺度に置き替える事ができる。以上から、幼児教育科生・国文科生の運動意識の違いは、本学に限っての事ではない事がわかる。身体行動を主としていかなばならぬ幼児教育と、主として読み・書きといった机上での勉強が中心をなす国文科との相違は、短大進学以前から、個々に持ち合わせているものと考えられる。言い替えると、運動意識の違いを個性としてとらえるならば、個性の似かよった者が同学科に進路を選択してきた。という事になる。



図Ⅲ 専攻別による積極的指数の比較(%)
(私立短大協会 松島等)

Ⅲ 今後の方向づけ

短大体育は、各大学の実情にあったもので仕組み、構成されているが、現在ではそのほとんどが正課体育として、時間割の中に盛り込まれ展開されている。しかし、体育施設の実態だけを見ても、体育をとりまく環境は厳しいものがあり、附属短大であるがゆえの施設共有、大学が都市部にあるため、施設設備がされないまま、借用施設にゆだねている、又広い敷地を必要とする体育施設を取りこわし、他施設に替えてしまう。といった実状も耳にする。そんな中で、

本学の占める位置は、58年度の施設拡充に伴ない、新年度からの体育活動の一層の活発化を図ろうといったすばらしい環境にある。多和はる女史の言葉を借りて言うならば、「体育科目の充実を図ろうとする時、最も必要とするものは施設であり、その良否は教員の力以上に体育の効果を左右するものである。」本学では、この恵まれた施設環境を最大限利用していく事が、より良い実践の一步となるであろう。

大学体育見直しが叫ばれる中で、いくつかの実践が報告されている。大学のおかれる環境が、それぞれ異なるため、そのまま本学に取り入れる事は、不可能であり、又不適当であると考えるが、いくつかの大学に共通して見られる点があるので、掲げてみた。

- 1 大学の保健体育らしい科学性を持たせる事。
- 2 課外体育活動への活発な働きかけ（特に短期大学）
- 3 大学の実状に合わせての生涯体育、社会体育の推進。

以上については、本学においても、指導可能であり、又同じ考えを持つものである。今後の実践の力として、他大学の経過を見つめていきたい。

表4は体育実技に対しての「不満足」の理由についての調査報告を一部抜粋したものである。これを本学にあてはめ考えてみると、「時間の不足」については、課外体育の活発化を図る事で解決可能である。「施設、用具不足、多人数」については、本学の場合先に述べたとおり、恵まれた環境にある。といって良いと思う。「科目の偏り、制限」に対しては、正課体育の中で多様化するスポーツ種目や、学生の欲求に答える事は困難であると考ええる。この点についても課外活動に解決の方向を見出す事ができると考える。最後に、「内容がいかげん、単なる遊び」「教師の質、指導方法」については、本学学生の運動意識の調査と重ね合わせ、考えてみたい。

本学学生の調査結果から、幼児教育科生の運動意欲が他に比較し高い事を知り、指導者にとって、授業展開のしやすい受講生であった事を改めて知らされた。そして、国文科の新設で、その授業展開を考えるうちに幼児教育科の授業をも見直す良いきっかけとなった。

先に述べた国文科生のレポートの中で、学生の1人が言っている「大学にまできて何故体育をしなければならぬか。」の言葉に驚くのではなく、何故必要なのか、を共に考え、知識として理解させるのではなく、体得をさせ、社会人として送り出す事が短大体育の成すべき事と思う。

体育教育は、単に知識のおしつけや、運動能力の向上、集団行動の体得などに終わるものであってはならない。持てる知識を、1人1人が、その身体運動によって時間を経ながら体得していき、その結果、自主的な身体運動をもって自らの健康が管理できる能力を養う事を主たる目的とするべきと考える。この目的を達するため、授業で行う事は、その展開に大学らしい科

表4 体育実技に対しての「不満足」の理由 (%)

項目 \ 時代	小学校	中学校	高校	大学
時間の不足	6.2	6.9	9.4	24.6
施設・用具の不足 多人数	12.4	11.9	9.4	9.3
内容のいかげん 単なる遊び	5.2	16.3	13.9	21.6
教師の質、指導法	26.8	27.7	18.8	11.6
種目の偏り・制限	20.6	17.8	22.8	13.0

(九州地区生涯体育研究会報告書 1980より)

学性を持たせ、1人1人に自らを正しく評価する能力を養わせる事である。

この実践を重ねる内に、学生の自主的身体運動は、課外活動や、空時間を利用してのレクリエーションスポーツ活動に発展し、現在より活発な運動行動が見られるようになるであろう。そして、このような正課体育から課外体育活動への積極的な移行は、学校体育から、社会体育の積極参加という場面において大きな力となると考える。

以上授業の見直しを考えてきたが、これを具体的な活動内容にほり下げ、最初に掲げた体育のねらい4項目を学生に体得させる方法を構じていかねばならない。

10年以上経過してきた幼児教育科の学生と初年度で一步踏み出したばかりの国文科の学生とを比較する事に無理があったかも知れぬが、始まったばかりであるからこそ、積極的な指導の方法を考える必要があると思う。

体育教育は、学校体育で終りをとげるものであってはならない。学生は今、体力の充実期にあり、運動に関しても、生涯を通じていえば、欲求する時期にあるといえよう。この「運動の欲求」が、年齢を経るにしたがって「運動の必要性」に変化していく事を多くの者が体験するであろう。健康でありたいと願うならば、進路の違い、職業の違いを越えて生涯を通じ、その年齢、環境に合った体育を遂行していく必要がある事を理解させねばならない。体育教育を両学科生に異なる事なく理解させ、学校全体の体育活動を活発化させていく事で、学科を意識しない体育教育ができるよう進めていきたい。

〈参考文献〉

- | | |
|---------------------|----------------------------|
| 私立短大体育担当教職員研修会資料集 | 日本私立短期大学協会 |
| 大学体育の現状と課題(1) | 滝沢英夫 体育の科学 Vol. 32 1982 |
| 横浜市立大学の体育教育の実践をふまえて | 片尾周造 " Vol. 33 1983 No. 4 |
| 福岡大学における体育の現状 | 梶山彦三郎 " Vol. 33 1983 No. 7 |
| 名古屋大学の正課体育授業 | 松井秀治 " Vol. 33 " No. 6 |